

## 「霧の只中の明けの明星のように……」

——マイスター・エックハルトの言語理解における、〈一性形而上学への精神形而上学の統合〉という事態究明へ向けて——

長 町 裕 司

### 1 はじめに

この論考は、ドイツ語説教 Nr. 9 „Quasi stella matutina in medio nebulae et quasi luna plena in diebus suis lucet et quasi sol refulgens, sic iste refulsit in templo dei“ のテキスト読解を通して、エックハルトの言語理解の諸層に含蓄された問題構制の要諦を暴き出すことを主眼としている。けれども、そのように求心的にエックハルトの思考構造の根幹へと押し進む試みは、決してその言語を巡る思索の奥行きと全射程を取り逃がしてしまうような先行投企の枠組みに定位することを意味するのではない。むしろこの説教の思考内実を再解釈し自得するためには、「ことばの本質生起の在り処」を場所論的に究明するエックハルトの幾重もの思考脈略を組織的に考察することを理解背景としなければならないであろう。然るに他方、この説教 Nr. 9 における「言語理解の凝縮された呈示」は、それが正にエックハルトにおいて言葉の本来的可能性（本質開示）として成立する全説教活動の根本的志向（Grundintention）を明らかにするという点で、その言語理解が孕む根本的な問題の解釈学上の布置（die hermeneutische Konstellation）を照らし出すのである<sup>1)</sup>。

まずは上掲説教の展開構造を素描しておくことにしたい。冒頭から全体の三分の二以上を占める部分は、この説教の基礎となっている聖書の言葉（シラ書 50・6-7a の引用句）の内の最後の語「神の神殿（に於いて）」に極限された考察でもって始まる。そしてそれは、「〈神〉とは何か、そして〈神の神殿〉とは何か」という二つの問いを巡るエックハルトの高度に洗練を経た理論的省察を通しての展開となる。われわれはこの分量的に大半の部分を、当該説教においても顕著な〈秘儀講話的（mystagogisch）な呼びかけ〉へと収斂する<sup>2)</sup>根本構造の中での「前置き」と解釈し、その第二の問い（：神の神殿とは何か）に対するエックハルトの独創的解答とこの論考のテーマが連繋する点へと論及するに留める。二つの問いを巡る二段階の論述の後

で初めて第三の部分として、「霧の只中の明けの明星のように……」という句が主題化される。しかしこの句全体は、それが >quasi (のよう)に< に導かれていることに解釈が集中して定位し<sup>3)</sup>、そこから更にそれと並行関係にある「(その日々の) 全盛の満月のように」という句が同一の解釈境位において説き及ばれる。そして説教は、>quasi< が >biwort (副詞・添え言葉)< としての文法上の機能を有することの言語理論的反省から、「靈魂の知性的活動本質」に於ける始原的ことばの生起 (= 神の子の誕生)、即ち「靈魂と神の本質関係」の開明へと終極する。

全体分量の三分の一以下の第三の部分、然るに説教の中樞的部分は、人間の語り (oratio) の或る部分的な構成品詞である quasi の文法的機能の考察をもって始まる。そして結びの祈りにおける〈秘儀講話的呼びかけ〉も、その quasi が biwort (Beiwort) としての身分を持つこと<sup>4)</sup>から、「始原的ことば wort の許にすべての時間を貫いて在る (alle zit bi…sin) 靈魂の一なる本質的働き」にわれわれの理解を照明しようとしている<sup>5)</sup>。但し、この部分の思考内実を詳細に分析してみると<sup>6)</sup>、そこにおいて表明され顕現化する〈(始原における) wort と biwort の統一〉へとエックハルトの根本的志向が集約化する躍動構造を読み取れる。しかし更に、エックハルトの説教として語られる言葉の本質生起 (従って、彼の聖書解釈の原理であり信仰内容の思惟における透徹) は、biwort sin (副詞であること) としての人間の靈魂の本質関係規定へとその基礎を露開するのである——「…副詞 (biwort)。これは、私が私のすべての説教において意図してきたものである」<sup>7)</sup>。この表明に含蓄されている根本事態を本稿で私は、「一性形而上学への精神形而上学の統合」という思想要因へと極まる思惟のエックハルトにおける開闢として究明しようとする。

〈一性形而上学 Einheitsmetaphysik〉とは、一性 (unitas) をそれ自体無制約な始原原理 (Urprinzip) として、「より先なる (prius)」原理である一性からの「より後なる (posterius)」制約された多性への下降的展開 (explicatio) において多様な存在者 (ens) の場である世界現実全体 (universum) の成立を理解可能にする組織的思考である。それは通常、〈存在形而上学 Seinsmetaphysik〉とは区別された形而上学的思惟様式として、哲学史の内部で固有な伝統を織り成していると考えられる。アリストテレス的及びトミズムの伝統においても基本的な存在形而上学は、感覚的経験に媒介された存在するもの (ens) における現出を思考の起点として、「われわれにとって (quoad nos) 最後のもの・究極的なもの」である存在それ自体 (ipsum

esse) へと遡ってゆく道に伴う知の段階的・発展的自己形成を基礎とする。これに対し、一性形而上学の構想は、端的に洞察可能な「絶対的に一なるもの」の理解を基点とする「原理から発出した諸相 (pricipiata)」への自己展開（無媒介に成り立つ原理的理解から差異性の場への分化）を組織法とする<sup>9)</sup>。ところがこの一性形而上学の構想にとって、始原原理的一性は、存在論的にも (ontologisch) 認識の本性に即した省察においても (gnoseologisch) 「端的に第一のもの」であるとしても、この一性の卓越 (superexaltatum) と充溢 (plenitudo) が再び翻って「洗練された存在理解」を彫琢することになる。即ち、一性形而上学と存在形而上学の二者択一といった対立図式は、エックハルトの許での形而上学的思惟の内部動向を厳密に査定する上では単に仮構でしかない<sup>9)</sup>。それ故、「エックハルトの形而上学において優位を占めるのは一性形而上学である」というテーゼ化が、もし（上述した規定上で）存在の形而上学を排斥する思想方向をもって主張されるならば、凡そ支持できない<sup>10)</sup>。むしろ、一性形而上学と存在形而上学の関わりを媒介する〈精神形而上学 Geistmetaphysik 展開の端緒〉が思惟そのものの成立根拠の開頭と共に隠れた主要動因となっていると言えるのではなかろうか——それは即ち、多様な存在者 (ens) への関与から精神なるものが存在者の秩序を基盤とする自己形成（精神の現実態性への形相化 formatio）を通して自らの形而上学的本性への超出を見出す「(アリストテレス受容を通してのトミズムの許での) 有限な認識の形而上学」を経由する精神理解<sup>11)</sup>からの乖離を意味する。エックハルトに始まりニコラウス・クザーヌスへと継承されてゆくドイツ神秘思想の系譜的發展にとって、〈精神形而上学として自らを展開せしめる一性形而上学〉という根本動向が、新プラトン主義的構想の自覚的刷新の契機において決定的であると言える<sup>12)</sup>。その際、精神の根源的自己理解が成り立つ在り処は、始原的一性と統一の内での本質現成に於けるものとして究思される。この本質現成からの疎隔・脱離であるところの「多性 (= 存在するもの ens における無性として、単に否定的なるもの negativum) への分散」、及び一性の許で本質現成するものの充溢への「上昇的還帰」(否定の否定 negatio negationis) としてエックハルトの〈存在についての言明〉の諸コンテキストは理解可能になる。

## 2 エックハルトの言語理解の要諦を呈示する、ドイツ語説教 Nr. 9 中枢部の註解

「霧の只中の明けの明星のように」という聖書の中での表現の解釈は、この星が時

間的経過の内での位置的相異を有することから二重の名称（：明けの明星，宵の明星）で呼ばれるにもかかわらず，両方の位置が光の基点である太陽から同一の近さに留まる恒常性に在ることを主眼とする<sup>13)</sup>。この（時間における限定・規定性を脱去する）「恒常的な近さ（alwege gleich Nähe der sunnen）」<sup>14)</sup>は、「明けの明星のように」の句が〈靈魂の神への関係〉へと転用されるための生命線を成している。同様に、「（その日々の）全盛の満月のように」という並行する句は，月が大地と太陽の中間位置を運動し大地から離れて太陽に近づく程に光の力を得て満ちることから，人間が中間的存立の動性を存在することをわれわれの理解に補うものと解釈できる<sup>15)</sup>。だがここでも，「月が太陽から直接に光を受け取る，それ程に太陽に近づく」力強い（krefitic）在り方を示すのは，「靈魂は地上のもの（被造物）を超えて高められる程に，益々力強く在る」ことに対応する<sup>16)</sup>。以上，聖書の二つの引用句が「……のように（quasi）」に導かれた副詞（biwort）句であることから，神がその内に語られ得る言葉の特権性は，「神的始原に於けることば（wort）の許に〔近くに〕副詞（biwort）として在る統一」として表明される（„daz man bi dem worte si ein biwort“）<sup>17)</sup>。従って，このドイツ語説教 Nr. 9 をも含めエックハルトのすべての説教の中心的志向（意図 intentio）は，自らがそれであるところの〈神の始原的ことばの許で副詞として在る言葉〉の本質生起へと人間的靈魂を回帰的に再生させる呼びかけに極まるのである——「人間は，〔…〕——私の説教全体はそのすべてと共にこのことへと終極するのであるが——明けの明星のようにならなければならない，つまり，常に神と共に居合わせ神の許にあって，同じ近さの内，すべての地上的ものを超えて高められ，ことば（wort）の許で副詞（biwort）でなければならない」<sup>18)</sup>。

さて，説教を締め括る栄唱の祈願の直前でエックハルトは，トマス・アクィナスに先行的に見出せる言語階層<sup>19)</sup>の受容と変容を通しての〈言葉の三階層〉を呈示する——「言葉には述べられたものがある，それは天使，人間，すべての被造物である。別の言葉は，考えられ〔然る後に〕述べられるもので，それにより私は，自らへ何かを像化することが可能になる。更に，述べられることなく考えられることなく決して外へと歩み出ない別の言葉があり，むしろ語る者の内に永遠に留まるのである」<sup>20)</sup>。

このテキストの末文で先ず注目すべきは，通常は「述べられる（vürbrâht = vorgebracht）」ものとしてことばを基本的に性格づける様態の欠如（：un-）からそれに先立つ次元の開示が主題化されているということ，である。しかし更に遡って，この次

元開示は、「述べられる」ことの過程的前提である「考えられる」という事態に対しても、その欠如を示す接頭否定辞 un- を通してことばの在り処の奥行きへと徹底化されているのである。「述べられることのない」とは、音声による外的表出の欠如を意味していることは明らかであるが、「考えられることのない (unbedäht)」という表示によって照明される連関が問題である。トマスの「心のことば (verbum cordis)」を巡る論点に倣い<sup>21)</sup>、媒介的 (discursivus) 推論へと歩み出る思惟 (cogitatio) を含まない知性の直観的な活動、と解することで果たして充分であろうか？ こう解釈するならば、ドイツ語説教 Nr. 9 と共に、》Paradisus anime intelligentis《における説教 Nr. 4 での「私の思考 (思い巡らしたこと) へと像化される (gebildet wirdit in mime gedanke)」ことの欠如、従って判断作用 (iudicium) への契機を内含しない知性の内在的懐胎におけることばの存立に一致することになる。更にエックハルトの当該説教 (Nr. 9) の中でも、諸能力が靈魂において身体を通して開花するのは、「知性の火花 (ein vünceln)」が——それら諸能力の発現に先立つ根元において——認識するものとしての靈魂自体の知性的本質を成すことに基礎をもつことが示唆されている<sup>22)</sup>。但し上記のテキストでも、接頭否定辞 un- が単に思惟の作用としての論理的な否定性 (Negativität) の機能における表示ではないのならば、その生成基盤からの動態として見究められる圏域へと遡行することが要求されてくる。「音声へと語り出される」「表象化へと歩み出る思考」「被造的次元へと像化される言語」——これらの表示と共にある傾向は、エックハルトにとっては「統一・充溢からの墮落」として端的に否定的なるもの (negativum) を意味するのであるから<sup>23)</sup>、接頭否定辞 un- は否定的なるものに対する否定 (negatio negationis) として生起する事態を開示することになる。ところでエックハルトにおいて、この「否定の否定 (negatio negationis)」こそは、神なるものが端的に主題化される根本規定なのである<sup>24)</sup>。

始原におけることば wort の許へと統合されて在る「副詞 biwort としての言葉の本質生起」は、この説教の最後の部分で、〈一性形而上学へと統一された精神形而上学的省察〉として自らを敷衍し得る端緒を示唆している。「述べられることなく考えられることなく、決して外へと歩み出ることなく、語る者の内に永遠に留まることば」、即ち「内部へと生み出され秘匿されたことば (das inwendig geborene und verborbene Wort)」とは、このことばを唯一語る者である父なる神 (: 始原なき始原) の内に受容され内在する「神内のことば (: 始原からの始原)」として出生している<sup>25)</sup>。

ここで、一性の本性的出生に対して副詞 biwort として人間を通して生起する言葉は、「絶えず内へと働きかける (allez inwert wirkende)」 靈魂の知性的活動本質 vernünfticheit の〈自らの根底を究める〉<sup>26)</sup>力強さによって、始原に於ける神的事ば wort へと究極的に合一化される存立を有する、という精神形而上学的省察が付加され得る<sup>27)</sup>。靈魂の基底的な知性的活動本質は、「始原に於けることばと人間を通しての副詞としての言葉の生起の遂行的統一」を働きかける力であると共に、その遂行的統一が営まれる場であることによって、神の合一が成就される非-媒介的な活動態そのものに他ならない<sup>28)</sup>。

「神と共に一つの働きを遂行する (mit gote würgen ein werk)」<sup>29)</sup>靈魂の基底的な知性本質の活生は、更に他のドイツ語諸説教でも、「靈魂が神の許での一つの働きにおいて一つの存在を成す」<sup>30)</sup>〈神の子の誕生〉を巡るエックハルトの思想の独創性として展開される<sup>31)</sup>。Nr. 9 の説教を初めそれらの箇所からも、人間を通しての言葉の生起がその許で (bi sin) 副詞として在ることを要請される「働きの統一 (Wirk-einheit)」は、ことばの出生がそこに於いてであるところの始原的一性の非差異化性 (Ununterschiedenheit) をその遂行基盤としていることが帰結する<sup>32)</sup>。

### 3 補充考察：エックハルトの語りにおける、「思考可能なるもの」の成立連関へ向けての究明

〈靈魂の内奥に生まれ出ることば〉= 〈神の子の誕生〉と定式化される相関が「始原の自己表明」として同一の根本事態を意味指示することの強調は、単にエックハルトの中心思想として幾重ものテーマを伴って展開されるだけではない。この根本事態の自覚的開示自体が、そのテーゼとしての基礎づけをも可能にする思惟の成立根拠を照らし出すのである（「始原におけることばの生命は、人間の光であった」<sup>33)</sup>）。以下の考察によって、「始原 principium の非-差異化性 Un-unterschiedenheit を基盤にして始原から本質現成することば」の存立は、〈一性 unitas それ自体の遂行的統一（：一性に於いて一性から本質現成するところのものは、一性から下降・脱離する否定的なるものの「否定の否定」として純粋な肯定へと統一されて在ること）〉として理解され、その存在論的身分から上記に定式化された根本相関の開明が主題化され得る。それは、「神の神殿とは何か」という先行する問題解明に光を投げかけることにもなるのである。

靈魂の内奥を成すそれ自体活動的な知性本質（: grunde der sēle, vünkelin der sēle）は、（存在するもの ens を基点とする限りでの）存在という規定に先立って存在の根拠・理拠（ratio）である「神の根底」との統一の内にある<sup>34)</sup>。エックハルトに特徴的な次のような一連の諸言明——「そこでは、神と靈魂の間の真正な合一が生起する<sup>35)</sup>」，「神の在るところ、そこには（私の）靈魂が在り、そして（私の）靈魂が在るところ、そこには神が在る」<sup>36)</sup>等——は、靈魂の基底的本質から分離されて実体化されるものは本来には決して未だ神では在り得ないことを帰結する<sup>37)</sup>。つまりこれらの言明は、精神的能力を通して分有（participatio）関係を遡る媒介的な上昇の道に先立って、「神がその神性全体と共に靈魂の根底の内に在る」<sup>38)</sup>〈神秘的合一 unio mystica〉の靈魂内在的な知性的活動本質における基礎を示唆している。靈魂の内部でそれ自体活動態にある基底的な知性本質における「ことばの出生」とは従って、神の一性的本質（神の根底）からの「子の永遠の誕生」と同一かつ同時であることになり<sup>39)</sup>、ここでは帰属的類比性も分有関係も成り立たない（——更に「絶え間なき誕生」とも述べられているように<sup>40)</sup>、時間的開始（Anfang）を有する、或いは突発的に生起する行為と理解されてもならない<sup>41)</sup>——）。

この理解背景から、エックハルトに特徴的な次の思考内実が十全に問題化される土壤が開かれる——「もしわれわれが神を存在において受け取るならば、われわれは神をその前庭（Vorhof）において受け取っているのである。何故なら存在は、神が住まう神の前庭だからである。けれども一体、神が聖なるものとして輝いている神殿内のどこに神は居るのであろうか？ 知性的活動本質（vernünfticheit）こそは、神の神殿である。神は、その神殿であるところの知性的活動本質以外の如何なる在り処にもより本来的に住まうことはないのである」<sup>42)</sup>〔存在 *wesen* はこのコンテクストで、被造的存在者からの——時間と場所を構成する——存在の意味規定で活用されている〕。エックハルトのドイツ語説教 Nr. 9 中間部でのこの言明は、「神殿（tempel）」及び「神が住まう（wonen）」という表現をもって、「神がその神性全体と共に在って非存在の内働く」<sup>43)</sup>（上述に開明された）靈魂の基底的本質との統一を述べている。確かにそれに続く論証は、能力論の構図に従って提示されてはいる。靈魂の内に働く一つの力（kraft）からの思考・認識が被造的存在者における存在を超え出る圏域において活動しており、この知能力が「神を善性からも〔存在者の〕存在からも脱皮させて赤裸々に受け取る」<sup>44)</sup>と述べられる。然るに認識・思考として働く知能力自

体は、「雫 (tröpfelin)」、火花 (閃光 vüncelin)、「枝 (zwic)」と比喩的に語られる由来性において成立しているのであれば<sup>45)</sup>、神が神性全体と共に住まう〈神殿〉そのものは神的始原との同等性 (aequalitas)・共本質性 (consubstantialitas) に在る知性的活動本質 (vernünfticheit) なのである<sup>46)</sup>。神の神殿の開顕とは従って、靈魂の基底である知性的活動本質を在り処とする「神的始原の表明 (発出 processio にして出生 geburt)」即ち「始原的ことばの本質現成」に他ならない<sup>47)</sup>。始原的ことばの本質性起 (「神の神殿」の在り処の開け) という神-存在論的 (theo-onto-logisch) 語りは、「自身を知る神が自ら自身において自ら自身を知る」<sup>48)</sup> 完全な自己還帰 (reditio completa in se ipsum)、自らの内に自らへと遡源する「一性そのものの遂行的統一」を指示している。何らかの限定された存在であること (ens) とその存在者の欠如 (non ens) の対立及び存在者の相互の区別 (distinctio) は、一性そのものの遂行的統一に対する否定的拒絶において成立しているのであれば、この存在論的差異性における二重襲 (Zwiefalt) が再び「差異化され得ない非差異性」へと遂行的に取り返されて在る (： „ego sum qui sum“ のエックハルトの解釈<sup>49)</sup>を参照) 根本事態は、一性の遂行的同一性へと統合された精神から育まれ得る形而上学の自己省察を表明している。

このようにエックハルトは、その非媒介的な知性本質・理念 (ratio idealis) の成り立ちそのものに於いて「ことばの始原根拠」を透察している<sup>50)</sup>。音声への表出に向けて (表象) 像化されゆくことば (像的な内的言語 das bildhafte innere Wort) によっては語られずに留まるところの神を語ることば (Got ist ein wort, ein ungesprochen wort)<sup>51)</sup> は、「靈魂の内に秘匿されている」<sup>52)</sup> からこそ、そのことばが聴取されるためには「〔外化への傾向を伴った〕被造的な何かから遠く離去して……靈魂はただ独りとなり、それ自身沈黙せねばならない」<sup>53)</sup>。神が名を持たず音声化される言葉によっては語られ得ないと同様、「靈魂もその根底においては〔そのような言葉によっては〕語られ得ない」<sup>54)</sup> からである。つまりエックハルトにとっては、音声へと多様に表出されたいわゆる「外的言語 (verbum exterius)」を基点とする言語の本質の明るみ化は原理的に不可能なのである。この点では、「外的言語は——他者への相互主観的な伝達機能というその積極性にもかかわらず——ただ内的言語に依存する限りで言語としての本質を維持する存立を保つ」とするアウグスティヌス・ストマス的な言語把握の思考法の継承でもある。しかしエックハルトの場合、更に外的言語 (即ち、



可感的多様性・時間性の下での表象性へと定位した像化)が破棄 (Vernichtung) されること (: via purgativa = 靈魂の沈黙化) においてこそ、言語の本質現成が——眼前化する他者への質料的な伝達は欠如するにもかかわらず——その純粹に知性内在的な普遍性と共に生起している、という根本主張がなされる<sup>55)</sup>。外的に表出化される言語からはこの「ことばの始原根拠」は語られ得ない前-言語的次元に留まるが<sup>56)</sup>、自らの知性的活動本質の内なる原像へと回帰する靈魂の根本動性においては、思惟を通して存在の現実全体が知性的に透徹される理拠 (ratio cogitationis) なのである。

### 注

エックハルトの著作からの引用は、以下の略式表示と略号によるものとする：

DW …Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Abteilung I : *Die deutschen Werke*, hrsg. von Josef Quint und Georg Steer, Stuttgart 1936 ff.

後続する大文字ローマ数字は巻数, S. は (同巻内での) 当該頁, Z は (その頁での) 引用する行を挙示する。[] 内は、同巻における近代ドイツ語訳の該当頁。

LW …Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Abteilung II : *Die lateinischen Werke*, hrsg. von Josef Koch, Heribert Fischer, Konrad Weiß, Karl Christ, Bruno Decker, Albert Zimmermann, Bernhard Geyer, Ernst Benz, Erich Seeberg und Lorin Sturlese, Stuttgart 1936 ff. 後続の略号表示は DW の場合と同様であるが, n. はパラグラフの番号を示す。[] 内の表示は、LW に関しては用いられない。

*In Ioh* …*Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem* (in: LW III).

以上、頻繁に引用されるラテン語著作に関しても, n. は当該著作内でのパラグラフ番号を示す。上記以外のエックハルトの個々の著作が引用される場合には、その全タイトルと DW 或いは LW における当該箇所を () 内に記すものとする。

- 1) Kurt Ruh, *Meister Eckhart. Theologe·Prediger·Mystiker*, 2. überarbeitete Auflage, München 1989, S. 63 ff. は、14 世紀中葉のドミニコ会特有の靈性と教説を伝える説教集 „Paradisus anime intelligentis“ においてもエックハルトのものとして伝承されたこの説教 (ここでは Nr. 33) を当該説教の主要テーマとの関連で解釈している。
- 2) Cf. Alois Maria Haas, *Meister Eckhart und die Sprache*, in: ders., *Geistliches Mittelalter*, Freiburg/Schweiz 1984, S. 65-86, S. 72.
- 3) „Als ein morgensterne miten in dem nebel'. Ich meine daz wörtelîn 'quasi', daz eizet 'als', …“: DW I S. 154 Z 7-8 [S. 465] .
- 4) エックハルトは当時の民衆ドイツ語 (Volkssprache) における語分類の通常の把握

- 仕方に依拠している。この点を巡っての論議について：Siegbert Peetz, Diskussionsbericht zum 2. Tag: Philosophisch-theologische Positionen und Voraussetzungen der mittelalterlichen Mystik, in: *Abendländische Mystik im Mittelalter. Symposium Kloster Engelberg 1984*, hrsg. von Kurt Ruh, Stuttgart 1986, S. 228.
- 5) DW I S. 158 Z 8-9 [S. 466].
- 6) 近年の優れた研究として：Susanne Köbele, BÎWORT SÎN. „Absolute“ Grammatik bei Meister Eckhart, in: *Zeitschrift für deutsche Philologie* 113. Band 1994, Sonderheft: Mystik, hrsg. von Christoph Cormeau, Berlin 1994, S. 190-206.
- 7) „[...] ein biwort. Diz ist, daz ich in allen minen predigen meine“: DWIS. 154 Z 8-9 [S. 465].
- 8) Josef Koch, Augustinischer und Dionysischer Neuplatonismus und das Mittelalter, in: *Kant-Studien* 48, 1956/57, S. 117-133, besonders S. 120 und S. 132 f.
- 9) Vgl. Karl Albert, *Meister Eckhart und die Philosophie des Mittelalters (Betrachtungen zur Geschichte der Philosophie, Teil II)*, Dettelbach 1999, S. 166-167; 185-186; 193. K. Albert はエックハルトの超越論概念論 (Transzendentalienlehre) を詳細に分析・検討することによって (ebd. 150-185) この結論に至っているが、更に一性 (unitas) の形而上学が純粋な知性認識活動 (intelligere) への関係において厳密化されるコンテキストを解釈してゆく (ebd. S. 198 ff.).
- 10) Cf. Herbert Wackerzapp, *Der Einfluß Meister Eckharts auf die ersten philosophischen Schriften des Nikolaus von Kues (Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters)*, hrsg. von Josef Koch, Aschendorff Münster 1962, S. 46-47; S. 56.
- 11) 前掲拙著 *Selbstbezüglichkeit und Habitus. Die latente Idee der Geistmetaphysik bei Thomas von Aquin*, München 1997, S. 297 ff; S. 319 f; S. 331 ff.
- 12) Cf. Josef Stallmach, *Ineinsfall der Gegensätze und Weisheit des Nichtwissens. Grundzüge der Philosophie des Nikolaus von Kues*, Aschendorff Münster 1989, S. 99 ff, besonders S. 100-101.
- 13) 従ってエックハルトの意図は、二重の名称が意義理論的 (bedeutungstheoretisch) には同一の対象であることの (言語論理学における) 指示理論 (Referenztheorie) のための単に古典的範例を示すために、明星 (金星 *venus*) の名称を問題としているのではない。
- 14) DW I S. 155 Z 7-8 [S. 465].
- 15) DW I S. 155 Z 12-S. 156 Z 6 [S. 465].
- 16) DW I S. 156 Z 6-7 [S. 465].
- 17) DW I S. 154 Z 11-S. 155 Z 3 [S. 465].
- 18) DW I S. 156 Z 9-S. 157 Z 2 [S. 465].

- 19) ここではトマスの言語理論自体を主題的に述べることはできないが、トマスによって理論化された言語階層性に関しては、少なくとも初期著作には（特に *Quaestiones disputatae de veritate* q. 4 a. 1）三つの階層が明確に読み取られる。『真理について』の当該箇所では、アウグスティヌスから学び取られた「内的言語 (verbum interius)－外的言語 (verbum exterius)」の区別が設問に対する論究の前景となっている。ところがトマスは、この設問の第一項（：神的なものにおいて、ことば〔という名称 nomen〕は固有に語られるか？）において、芸術家の製作活動を手引きに「言語の三つの階層序列」を導き出す。即ち、①知性によって懐胎されたまま、外的音声なしに語られたことば = verbum cordis (心のことば) [芸術家の創造活動においては、その志向する終局 finis に相当] ②外的に発せられることばの範型 (exemplar) として、音声による表象化の傾向を伴うことばの在り方 = verbum interius (habens imaginem vocis) [芸術家が抱くイデー・創造的観念に相当する] ③表出され音声となったことば = verbum exterius (vocis) [既に存在することへと産出された作品に相当]、の三階層である。そしてこの序列は、語りとしての言語現象において、不可逆的に生起している、と述べられる。更に注目すべきは、このコンテキストでトマスが上記①の意味での(知性内在的に懐胎されたままの) verbum cordis のみが一切の質料的なものへの下降から離存して固有に (proprie) 神について語られる、とする点である。即ちトマスはここで、ことばが成立するその本源は媒介的推論 (discursus) を伴わない知性の(そこから諸存在者の理拠 ratio が定義として表明されるに至る単純な本質把握 apprehensio simplex における) 現勢的な活動で十分である、とする。
- 20) „Ez ist ein vürbräht wort, daz ist der engel und der mensehe und alle crêatüren. Ez ist ein ander wort, bedäht und vürbräht, dâ bi mac ez komen, daz ich in mich bilde. Noch ist ein ander wort, daz dâ ist unvürbräht und unbedäht, daz niemer ūzkumet, mēr ez ist êwlich in dem, der ez sprichet;“: DW I S. 157 Z 3-6 [S. 465].
- 21) *De veritate* q. 4 a. 1 ad 1; cf. *Summa contra gentiles* IV 14 n. 3499; *Quaestiones disputatae de potentia* q. 8 a. 1. Cf. 拙著 *Selbstbezüglichkeit und Habitus. Die latente Idee der Geistmetaphysik bei Thomas von Aquin*, München 1997, S. 101 f.
- 22) DW I S. 151 Z 1-2 [S. 464].
- 23) *In Expositio libri Exodi* n. 74 (LW II S. 77 Z 6) n. 101 (LW II S. 103 Z 7); *In Ioh* n. 611; ドイツ語説教 Nr. 21 (DW I S. 363 Z 5-6 [S. 514]); *Sermo XVIII* 4 n.173 (LW IV S. 164 Z 6). — cf. Lauri Seppänen, *Meister Eckharts Konzeption der Sprachbedeutung. Sprachliche Welterschöpfung und Tiefenstruktur in der mittelalterlichen Scholastik und Mystik* ?, Tübingen S. 76-78. この箇所では、エックハルトの外的な基準による追検証可能性を欠く言語思考法が「私的言語 (die private Sprache)」(：後期 ヴィトゲンシュタインによってその不可能性が明らかにされた「私だけに理解可能な内面性のことば」) 批判に抵触せず、むしろ別の根拠から私的言語なるものの実在性を否

定的なものとする「純粋な知性生命に普遍的に内在的なことばの生起」に他ならない、と解釈することにわれわれも同意したい（尤も、「知性内在的に成立する言語」という言語把握それ自体が再びヴィトゲンシュタインの言語批判の標的となるであろうが）。

- 24) ドイツ語説教 Nr. 21 (DW I S. 361 Z 10; S. 364 Z 4 [S. 514]); *In Ioh* n. 207; *In Ioh* n. 556; *Prologus in opus propositionum* n. 6 (LW I S. 169 Z 6-9).
- 25) DW I S. 157 Z 4-8 [S. 465].
- 26) Cf. *In Ioh* n. 9; n. 568.
- 27) DW I S. 157 Z 8-S. 158 Z 3 [S. 465-466].
- 28) Vgl. Burkhard Mojsisch, *Dynamik der Vernunft bei Dietrich von Freiberg und Meister Eckhart*, in: Kurt Ruh (Hrsg.), *Abendländische Mystik im Mittelalter. Symposium Kloster Engelberg 1984*, Stuttgart 1986, S. 135-144. ここでは, S. 140 及びそこでの脚注 (50) を参照.
- 29) DW I S. 158 Z 6 [S. 466]; cf. ドイツ語説教 Nr. 39 (DW II S. 262 Z 2 f [S. 685]).
- 30) ドイツ語説教 Nr. 6 (DW I S. 109 Z 8-11 [S. 454]).
- 31) 同説教 (DW I S. 110 Z 6-7 [S. 454]); cf. ドイツ語説教 Nr. 39 (DW II S. 264 Z 1 f [S. 686]).
- 32) *In Expositio libri Exodi* n. 58 (LW II S. 64 Z 12); *In Expositio libri Sapientiae* n. 144 (LW II S. 482 Z 4 f.); *Sermo XXIX* n. 298 (LW IV S. 265 Z 7 f.); cf. *In Ioh* n. 290 et n. 562 — 前掲した Köbele 女史の論文では更に, ラテン語諸著作の中で, エックハルトにおける①文法上のカテゴリーとしての副詞 (adverbium) もしくは「のように (quasi)」の〈靈魂と神の関係規定〉へと関連づけられた解釈と②キリスト論的な「ことばの神学」上の言明 (: verbum ad deum) がどのような一致点と共に差異化を示すのかを丹念に探求し, 中世の思弁的文法 (grammatica speculativa) がエックハルトの思惟を通して独自の形而上学的一神学的機能へと連携した言語の境位を可能にしていることを論じている (in: a. a. O., S. 201-206).
- 33) Cf. *In Ioh* n. 11; n. 20; n. 64-67; n. 83; n. 89; n. 139; n. 191.
- 34) ドイツ語説教 Nr. 15 (DW I S. 253 Z 5-6 [S. 490]); ドイツ語説教 Nr. 22 (DW I S. 380 Z 5-381 Z 2 [S. 518]); ドイツ語説教 Nr. 5b (DW I S. 90 Z 8 [S. 450]); ドイツ語説教 Nr. 67 (DW III S. 133-135 [S. 529-530]). — この最も特徴的なエックハルトの思潮の詳細な究明については以下を参照: Peter Reiter, *Der Seele Grund. Meister Eckhart und die Tradition der Seelenlehre*, Würzburg 1993, S. 320 f; S. 415 ff.
- 35) ドイツ語説教 Nr. 43 (DW II S. 325-S. 326 Z 1 [S. 698]).
- 36) ドイツ語説教 Nr. 10 (DW I S. 173 Z 8-9 [S. 471]); ドイツ語説教 Nr. 67 (DW III S. 129 Z 5-6 [S. 528]).
- 37) Cf. ドイツ語説教 Nr. 69 (DW III S. 174 Z 5-S. 176 Z 2 [S. 538]).
- 38) „…; dar umbe ist got in dem grunde der sêle mit aller sîner gotheit“ : ドイツ語

- 説教 Nr. 10 (DW I S. 162 Z 5-6 [S. 467]); cf. ドイツ語説教 Nr. 30 (DW II S. 95 [S. 656]).
- 39) ドイツ語説教 Nr. 38 (DW II S. 230 Z 4-S. 231 Z 6 [S. 679]); ドイツ語説教 Nr. 6 (DW I S. 109 Z 2-S. 110 Z 7 [S. 454]); ドイツ語説教 Nr. 5 B (DW I S. 90 Z 6-9 [S. 450]).
- 40) ドイツ語説教 Nr. 6 (DW I S. 112 Z 1 f. [S. 455]); cf. *In Ioh* n. 31; n. 585.
- 41) Cf. *In Ioh* n. 74. — 但し、突破 (Durchbruch) から見れば、時間性における自己把握からの脱去であり、分有関係における類比性の乗り越え (超越) に他ならない。Cf. ドイツ語説教 Nr. 52 (DW II S. 504 Z 4-S. 505 Z 6 [S. 730-731]); ドイツ語説教 Nr. 29 (DW II S. 76 Z 2-S. 77 Z 4 [S. 652]).
- 42) ドイツ語説教 Nr. 9 (DW I S. 150 Z 1-4).
- 43) DW I S. 151 Z 11-12.
- 44) DW I S. 153 Z 4-5.
- 45) Ebd. S. 151 Z 1-2.
- 46) *In Ioh* n. 5-6; cf. n. 35. — ディートリッヒ (Dietrich von Freiberg 1240/60-1318/20) の能動知性論においても、能動知性は神の *imago* が直接無媒介に成立している唯一の在り処であり、(作用因的な差異化に基づく類比関係に先立つ) 「形相的-知性的流出」による実体的同形相性 (*conformitas substantialis*) を有する自己活動態として「神との合一化」の遂行原理である、と既に明瞭に主張されている: Dietrich von Freiberg, *Tractatus Magistri Theodorici De visione beatifica*, 1. 1. 1. (3); 1. 2. 1. 1. 7 (2); *Tractatus De intellectu et intelligibili Magistri Theodorici*, II 32 (3). 後続の数字 (例えば 1. 1. 1 (2) など) は, Dietrich von Freiberg, *Opera omnia*, Tomus 1: *Schriften zur Intellekttheorie mit einer Einleitung von Kurt Flasch*, hrg. von Burkhard Mojsisch, Hamburg 1977 に従う。
- 47) エックハルトは、「始原なき始原〔:自己始原性 *Selbstursprünglichkeit* としての父なる神〕からの「始原の始原〔:等始原性 *Gleichursprünglichkeit*〕 — 中性的に始原に於ける出生としての〈始原からの始原〉 (*In Ioh* n. 359; n. 656; cf. n. 133; n. 161; n. 195) — である子」の同等性 (cf. *In Ioh* n. 362-363) が靈魂の知性的活動本質において生起することを述べている。
- 48) „Got in sin selbes bekantnisse bekennet sich selben in im selben.“ : ドイツ語説教 Nr. 9 (DW I S. 150 Z 7).
- 49) *In Expositio libri Exodi* n. 16 (LW II S. 21 Z 7-S. 22 Z 1); cf. *Sermo XLIX* n.510 (LW IV S. 425); *In Ioh* n. 207; n. 556.
- 50) *In Ioh* n. 70; cf. *In Ioh* n. 72; ドイツ語説教 Nr. 83 (DW III S. 448 Z 1-3 [S. 586]).
- 51) ドイツ語説教 Nr. 53 (DW II S. 529 [S. 732]); Cf. F. Pfeiffer, a. a. O., S. 77, Z 9

- 52) ドイツ語説教 Nr. 19 (DW I S. 312 [S. 502]).
- 53) ドイツ語説教 Nr. 1 (DW I S. 15 [S. 431]).
- 54) ドイツ語説教 Nr. 17 (DW I S. 284 [S. 496]).
- 55) 本稿の脚注 (23) を参照のこと。
- 56) Cf. *Expositio libri Genesis* n. 300.